

911.3  
18

芭蕉翁桃青居士

續夏野

江州栗津義仲寺



芭蕉翁終焉記

いづれかあるまゝに... 芭蕉翁終焉記の本文が縦書きで記述されている。

芭蕉翁終焉記の表紙に印刷された大きな文字。

芭蕉翁終焉記の表紙に印刷された縦書きの文字。

合候と子因縁よの不可思議のふすま動静の  
天和三年の冬、源川の草薙急火よりのふと激し  
初は火の勢をとりまき燃ゆるに生ひし是れ玉の  
鏡のうわめおのれの心なきに火宅のなまき悟り  
所候の心と誓ひて其の年暮のまよひ甲斐な  
りしりてあまの言のこつともかたむかひぬらん  
之更月下入無常のいひし若の跡よと神のう  
りしりていふれくく焼原の舊村よと結ひ  
し心もいふれくく源よとて一ふのそまきと結ひ

雨中吟  
雨の中吟は法堂をへて並みぬとすおかし  
とくは塔木の友ともくくひくくよのいしそまき  
く候しよとてあまの言のこつともかたむかひぬらん  
中、易よくりぬかりしりていふれくく源よと結ひ  
成時節、本卦のなまきとて年月の時とて言ふ  
合せく筮考せしりぬふし、華とて卦よあるしそま  
きの中、風の風よぬきもあまの言のこつともかた  
まきく、事ぬきも命つともかたむかひぬらん  
けりしりていふれくく源よとて一ふのそまきと結ひ







踏らぬてるるに柱をばうけ回す

この柱をばうけ回す心もせむやとてまじりては

かゝる風情の上も死に方の道と切ら思ふて悔ふる人の

おのれをばうけ回す心もせむやとてまじりては

居つてやうらむる水にけり非集の 木節

風の空にふととちかき鶴の音 木末

是の海も舟の林もやうらむ 惟然

神もやうらむる心は佐太のま 正秀

神のまがれし力や木のうせ 之道

唐土くいつつより唐のれ 加香

能くもやうらむる心は佐太のま 支考

あはれや候よつとそそふ船も 春舟

舟もやうらむる心は佐太のま 大神

いのちもやうらむる心は佐太のま 乙州

さうは生あめのはつたもて本もあつたまを死にまじりては

いふもあつたまを死にまじりては

なる若菜もやうらむる心は佐太のま

さうは生あめのはつたもて本もあつたまを死にまじりては



吹井とて路と指しめぬ此 音子

新抄云く鷹ありて先程は推の末ありて

幻燈蓋は燈の蓋一木着殿と燈とを以て

ありては燈の蓋なりと云ふなりと云ふ

の記しは燈の蓋なりと云ふなりと云ふ

と云ふなりと云ふなりと云ふなりと云ふ



為は書と船との自無に候なりとあるは  
かゝる程にそのまゝに遊書の興のなき  
ふかひやうなる人とのまじり合はるゝ  
新書の記と船の物事し程もなるふ同の  
春菫とあるの心算は是とて回向の後

於栗津義仲寺牌位下

晋子書

昔元禄七甲戌歲十月十二日



